

原爆文学研究会報

第四六号

原爆文学研究会 二〇一五年二月

加害の視点 私は長年、人為的な大災厄の生存者から聞き取りを続けてきた。まず、イスラエルでホロコーストの生存者から聞き取りを始め、やがて、彼らのうちの何人もの人から「なぜ、被爆者からも聞き取りをしないのか」と問われて、被爆者からも聞き取りを始めた。それはやがて、三世代のインタビューへと発展していった。その聞き取りの結果の一部を前者では『夜の記憶』（創元社、二〇〇四年）に、また後者では『原爆被爆者三世代の証言』（創元社、二〇一一年）という本にまとめた。

どの証言も忘れられない内容ばかりであったが、とりわけ、広島市の被爆者Y氏の体験は強く心を打つものだった。彼は当時、日本の植民地であった韓国に生まれ、幼少期、少年期を過ごしたが、旧制中学に入学するために一人で帰国、昭和一九年に広島市の専門学校に入学した。翌年八月六日、爆心地から二キロの地点の学校で被爆するが、重傷を負いながらも奇跡的に助かる。終戦からまもなく、原子野で瓦礫除去の作業をしていたとき、友人の語った聖書の言葉に打たれてキリスト教に入信し、人生観も変わる。その頃から、それまで「見下していた」韓国人への猛烈な罪意識に悩まされるようになる。アメリカへの怒りは不思議に感じなかつたが、韓国人、ことに韓国人被爆者への責めさいなまれるような罪意識に苦悩の日々を送るようになっていく。そのため、教職を定年退職してからは、韓国人被爆者の救済活動に余生を捧げることになった。この罪意識はいつたどこから来たのだらうか。詳細は前掲の拙書を参考にしていただきたい。生存者の持つサブイバーズギルトなら多くの被爆者も語ったところであるが、私は、韓国人被爆者への罪意識の観点からそれを語る人に今まで会ったことがなかつた。その意味でも、Y氏

の体験は強く印象に残るものとなった。

今年には戦後七〇年、先の戦争が我が国にとって何であったのか、改めて検証が始まっている。従軍慰安婦問題に端を発し、韓国との関係が戦後最悪の状態にあることは周知の通りである。右傾化の道を邁進するかに見える昨今の我が国にあつて、諸外国からは「歴史修正主義」と見なされる動きも拡がりを見せている。加害の事実を直視することがなければ、この先、我が国はどこに向かうのだろうか。戦前への回帰を予測させる暗い世相もある。今、私たちはまさに歴史の分岐点にいる。この分岐点において、被爆研究、原爆文学はどこに向かおうとしているのか。被爆者Y氏のような罪意識を非体験者が共有するのは至難の技だろう。しかし、共有できないまでも、私たち日本人が歴史の暗部を直視し、どこまで自分たちの心情や思想のなかに加害の視点を組み込んでいくのか、そのことが今求められているのではないか。この国の未来はまさにそこにかかっていると断言しても過言ではない。ここにおいて、原爆文学研究が今後どのような可能性を拓いていくのか、今問われている。（澤田愛子）

第四六回 原爆文学研究会報告

二〇一四年十二月二一日（日）に九州大学西新プラザで第四五回研究会を開催し、「戦後70年」連続ワークショップⅢ、Ⅳを行いました。

ワークショップⅢでは、「日本語ではなく英語で書くことについてどのような考えがあるのか」、「日本語としてしか表現できないものが出てきた場合はどうするのか」、「意識して韻を踏んでいるのか」、「二人が取

り上げた詩についてのジェンダー問題をどのように考えるか」、「アドルノの言葉についてお二人はどのように考えるか」、「『ベットと織機』で人間の延長としての道具のありかたに興味を持った」等の質疑がありました。

ワークショップIVでは、「韻文の「僕」から「彼」への変化をどのようにとらえるか」、「詩が受容されていく場の中で手垢のついたものにされていく怖さがあるのではないか」、「カタストロフィの前と後との連続性をどのように考えるか」、「3・11以前の詩人たちとつながっていくこととどのような意味があるのか」、「3・11後に発表された詩が、方法論として主張としてどのような可能性があるのか」等の質疑がありました。



◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅢ

「古典詩と現代詩の協奏——実作者を 迎えて」報告

高野 吾朗

原爆、原発、核問題、そして戦争。いまを生きる日本の詩人たちがこ
うしたテーマにいざ対峙しようとするとき、いったいそこからどのよう
な詩が編まれうるのだろうか。その創作過程で、彼らが直面することに
なるであろう「困難」とは、はたしてどのようなものなのだろうか。ま
た、そうした「困難」の数々は、一体いかなる結果を最終的にもたらし
うるのだろうか。

今回のワークショップでは、原爆・原発・核問題・戦争といった諸問
題を自らの詩の世界に投影させた経験を過去に持つ二人の詩人に、自作
詩の朗読も交えつつ、自らの創作過程の裏側を明かしてもらうことにし
た。またその際、自らの創作に少なからず影響を与えたと思われる先人
たちの原爆詩や戦争詩をも、同時にいくつか紹介・朗読してもらうこと
にした。本人自身の詩作品と先人たちの詩作品との「協奏」に耳を傾け
ながら、原爆文学研究における詩のありように関し、さらに議論を深め
ていこうとしたのが、このワークショップの主な趣旨であった。

わたしはこのワークショップの企画者であり、かつ登壇者でもあった。
もっぱら英語のみで詩作を続けているわたしは、二〇一三年に第一詩集
を米国にて出版したあと、現在は第二詩集の出版に向け、今なお活動中
の身である。このワークショップでは、①福島原発事故に着想を得た
自作英語詩「Entomology」（昆虫学）、②戦争と憲法の問題について書
いた自作英語詩「An Erasure Dream」（削る夢）、そして③故郷・広島
の原爆の問題について書いた自作英語詩「A Woman Full of Water」（水

だらけの女」の三作品を登壇者として朗読した。また、これら三つそれぞれに対照させる形で、「古典詩」ともいえる他の詩人たちの作品も併せて朗読した。①に対しては峠三吉の「影」（『原爆詩集』所収）を、②に対しては（米国の「ベトナム戦争詩」のジャンルを代表する詩人）ブルース・ワイグルの代表作「Song of Napalm」（「ナパーム弾の唄」）を、そして③に対しては、『智恵子抄』より高村光太郎の詩「報告（智恵子に）」をあえてぶつけてみた。

ちなみに、原爆や原発事故といった題材で詩作を行う際、わたしが直面しがちな問題群とは、主に以下のとおりである。

(1) 広島や長崎の原爆の問題に「個人的にできるだけ接近してみたい」という思い、および、「当時の被爆地の現実といまの自分との間にはどうしても埋めがたい距離がある」という別の思いの両方を詩の中に入れ込むには、一体どうしたらいいか。

(2) 日本の原爆や原発の問題を英語で詩にすることにより、新たに得られるメリット（またはデメリット）とはなにか。

(3) 原爆・原発事故にまつわる諸事象と、自分自身のいまの身近（かつ卑近な）現実とを詩の中であえてつないでみた場合、一体どのような効果が生まれるだろうか（たとえば、自分のなかでこれまでなかなか当然視してきたものを、今度は全く別の角度から窺い見ることが突如可能となる、といった結果が生じたりするのだろうか）。

(4) 原爆（あるいは原発事故）にまつわる事実（および先行文学）を、まるで漱石や源氏物語のごとく、「創作に利用可能な」日本文学の一つの伝統（を示す「指標」）ととらえてしまつて、はたして本当にいいのだろうか（そうすることにより、原爆または原発事故の「事実としての重み」を軽んずる結果になったりはしないだろうか）。

(5) 原爆や原発事故を詩の中で語ろうとする際（とりわけ犠牲者の「肉体」について語ろうとする際）、そこにあえて性的な内容挿入することは、はたしてどこまで不謹慎であろうか（あるいは、どのような詩的効果

を新たに生み出すのであろうか）。

(6) 原爆や原発の問題を、あえて「広島」や「福島」といった固有名詞を出すことなく、出来うる限り寓話的に描くことのメリット（またはデメリット）とはなにか。

(7) 日本文学のみならず、日本以外の国の文学をもあえて「自らの文学的伝統」とみなして自分の詩の中にどんどん投入していく方が、（とりわけ）英語で原爆や原発事故にまつわる詩を書こうとする際、かえってより有効な結果を生むのではないか。

(8) 原爆や原発事故についての詩を書く際、ブラックユーモアや喜劇的要素の挿入ははたしてどこまで有効か（どのようなケースで用いることがはたして可能か）。

個人的にピックアップした「古典詩」たちとわたし自身の詩との間に横たわる、多様なイメージの類似性（ないしは、興味深い差異の数々）をひとつひとつ丹念に炙り出していく作業は、今後の自分自身の詩作にとつても、たいへん意義深いものとなった。もうひとりの登壇者であった新井高子氏（新井さんは第二詩集『タマシイ・ダンス』「二〇〇七年」で小熊秀雄賞を受賞されており、詩と批評の雑誌『ミテ』の編集人も務めていらつしやる、わたしの敬愛する詩人のひとりである）、そして参加者の皆さん一同、かくも濃密な二時間の討論時間を持てたことを、今も心からありがたく思っている。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅢ

古典詩と現代詩の協奏——実作者を迎えて

「希望」の複雑性

新井 高子

わたしが原発事故に関わる詩を書く中で、影響を受けた詩人としてま

ず浮かぶのは、ナーズム・ヒクメット（一九〇二―六三）。日本では「死んだ女の子」の作詞で知られているが、近代トルコで最も重要な詩人の一人であり、投獄と亡命を経てモスクワで没した彼は、むしろ「世界人」だったと言っているのかもしれない。わたしの編集詩誌『ミテ』で、トルコ語詩の翻訳を連載していたイナン・オネルは、ヒクメットによる原爆や原発に関わる作品をこれまで五篇訳したが、なかでも「希望」（一九五八年執筆）という詩の衝撃は大きかった。

オネルは東日本大震災の三ヶ月後にこれを訳し、発表した（『ミテ』一五号）。当時の新聞は、津波の死者の名を連日知らせ、もちろん第一面では福島第一原発の惨状が報道されていた。天災と人災、その巨大な恐怖にだれもが動揺していたが、詩の書き手たちの中には、ことばを失って書けない状態に追い込まれる者、追い込まれたがゆえに詩が単純化していくことを嘆く者など珍しくなかった。

「稼働する、原子炉が稼働する／人工衛星が通り過ぎる、日が昇るころ」という詩行を、鮮烈に繰り返しながら展開するヒクメットのその作品は、地球という小さな惑星に生息する無数の人間たちの深い闇と淡い光を俯瞰した上で、陰惨と非情とごく平凡な日常の重なり合いを凝視する。ここで描き出される希望の「複雑性」は、ほかの書き手と同様に八方塞がりのわたしにとって、すぐには辿れそうにないけれども、それでも先に歩いた詩人の足跡が歴然とあることを教えてくれる、瞠目の作品だった。

じぶんの新しい詩集『ベットと織機』（未知谷）に、「ガラパゴス」「わんさ、わんさと」など原発に絡んだ詩を何篇かしたため、さらに、東北をどうとらえるかはいま進行中のテーマだが、まるでテニスの壁打ちのように、ヒクメットの複雑性はわたしのことばのボールを跳ね返し、その筋力を鍛えてくれる。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅣ
カタストロフィと〈詩〉

原民喜における詩と散文の往還

——『永遠のみどり』論——

高橋 由貴

本発表は、原民喜の文学的営為を詩と散文との双方の往還という観点から考察することによって、従来の記録や体験性に基づく読解とモダニズム的方法という両極の読解を架橋する試みである。常に「無口」と評されていた原が、原爆被災後いつそうの失語を潜り抜け、詩的修辞を駆使しながら「近代化された地獄」をどのように小説の企てにしたかを明らかにする。

まず、「断片・ノート」を確認した。ここでは「戦争のない社会」の「実現」という願望を「文学」にするために、「原始的」「植物的生存」にまで貶められた生と「永遠の女性」とを足掛かりにする旨が書き付けられていた。さらに昭和22～23年の友人宛書簡から、この時期の原の小説への傾注を確認した。広島から上京した原は、「詩はもう隠退して、通俗小説に抗い、「小説自体が熟」すことに力を注ぎたい旨を繰り返して述べていた。

次に、小説「永遠のみどり」の検討を行った。はじめに「氷花」「火の踵」「火の脣」といったメタフィクション小説をとりあげ、被災後を描く小説内小説の内容として「新しい人間」「永遠の人間」の形象化があることを確認した。「新しい人間」「永遠の人間」とは、見る主体Ⅱに見だけに特化した身体なき存在、見られる客体Ⅱ人間を逸脱する永遠の存在である。この主客の関係は、被爆後の体験を下敷きにした原の「近代化された地獄」のイメージとして小説内小説において模索されていた。このメタフィクション小説群に連なる「永遠のみどり」では、木々の

新緑を「嫩葉^{わかば}」と女への「嫩」で表現し、その後、樹木の若葉・花の色彩・明るい海といった「優しい」ものを、被災した「彼」が「憧れ」「慰められる」べき女性的形質として展開させる詩的手法が用いられている。過去と未来を繋ぐ無時間的で幸福な「緑」は、「近代化された地獄」の裏返しのものであり、常に物質性を逃れる流体的な形象を帯びる。主体（彼）も眺められる客体（女性）「緑」も、ともに言葉ならぬ声の「渦巻き」に擬えられている。この主題は詩的修辭を駆使した文体によつて支えられている。

最後に、同名の詩「永遠のみどり」を検討し、言葉ならぬ声の「渦巻き」が〈祈り〉として変奏されていることを論じた。以上のことから、小説と詩の双方を往還する形で被災後の「近代化された地獄」の形象化を試みる原文芸の特異性を論じた。

◇ 「戦後70年」連続ワークシヨップⅣ

カタストロフィと〈詩〉

アウシュヴィッツとヒロシマ以後の

詩の変貌——パウル・ツェランと原民喜の詩を中心に——

柿木 伸之

「カタストロフィと〈詩〉」をテーマとする今回のワークシヨップにおいて、二十世紀ドイツの哲学および美学を専門領域とし、ヴァルター・ベンヤミンやテオドーア・W・アドルノといった人々の思想を中心に研究している私の報告に求められていることは、まず「アウシュヴィッツ

の後で詩を書くことは野蠻である」というアドルノの命題に論及すること、そのうえで、これに対する応答とも言うべき「アウシュヴィッツ」以後の詩作品の一端に触れることで、ヨーロッパの歴史に決定的な断絶をもたらした「シヨアー／ホロコースト」という出来事の後、詩の姿を示すことであろうと考え、「アウシュヴィッツとヒロシマ以後の詩の変貌」という表題の報告を用意した。以前から、想起を結晶させることへ向けた詩のラディカルな変革という点で、パウル・ツェランと原民喜の「戦後」の詩作には通底する面があると考えていたので、報告では両者の詩を照らし合わせることも試みた。

報告の冒頭では、ともすれば独り歩きしがちなアドルノの命題を、その文脈から跡づけ、そこに含まれる問いを取り出すことを試みた。とくに「野蠻」という語は、「啓蒙」による文明の発展それ自体が「アウシュヴィッツ」の野蠻に結びついたのであり、その野蠻は今も形を変えて跋扈しているという認識から理解されるべきである。その現われがツェランも苦しんだ人種差別であることを省みるなら、「野蠻」とは現在の問題にはほかならない。本論では、野蠻な暴力の歴史の底流にある忘却を鋭く照らすかたちで、その犠牲者たちの記憶を結晶させるような詩の変貌を、原民喜とパウル・ツェランの詩作のうちに見届け、そこに含まれる詩のそのものの変革に、カタストロフィの後の詩の可能性があることを示唆しようと試みた。ツェランの「死のフーガ」と「迫奏^{ネレト}」、そして原の「原爆小景」の詩篇と「鎮魂歌」を検討したが、ワークシヨップのあいだに、「迫奏」の「ハリケーン」と、原の「永遠のみどり」の緑「うづまく」ことへの祈りとが、言わば背中合わせの関係にあることにも思い至った。こうした言葉の星座を捉えるなかで、今も続く暴力の歴史に抗うもう一つの歴史の概念を構想することが、今後の研究の課題である。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップⅣ
カタストロフィと〈詩〉

3・11に向き合った詩人たち

中原 豊

福島市在住の和合が震災五日後にツイッターを通じて発信を始めた「詩の礫」は大きな反響を呼び、これに続く一連の発信は出版メディアに移されるとともに、和合が精力的に続けている朗読、講演、ワークショップなどと相まって、震災以降の詩人の活動を代表するものとして広く知られている。和合の活動の特徴は、とりわけその出発点において、ツイッターを通じて読者との間に空間的な隔たりを超えた同時性を獲得していた点にあり、そこが関東大震災や原爆といった近代のカタストロフィの後に生まれた文学と異なっている。SNSから肉声による朗読まで、新旧の様々なメディアを駆使した和合の活動は、まさしく現代文明のあり方に深く根ざしており、アドルノのいう〈野蛮〉な行いと言ふこともできるが、それが広く人々の関心を集めている現実などを踏まえると、決して一面的に捉えることはできない。

また、和合はその発信の起点から宮沢賢治、中原中也らの詩句を自らの表現の中に取り込み展開させているが、まったく異なる時代背景の中で生み出された先行作品が震災後の状況の中で新たな光を放つ例は辺見庸にもあり（「無限の前に腕を振る」、「死と滅亡のパンセ」収録）、『廃炉詩篇』まで続く和合の表現の特徴の一つとなっている点も注目される。

宮城県南三陸町在住の詩人・須藤洋平は、震災をきっかけにして沈黙を破り、を出版し、哀悼と生き残ったことの罪悪感をモチーフとした詩を発表した（『あなたが最期の最期まで生きようと、むき出しで立ち向かったから』二〇一一・一二・三〇 河出書房新社）。さらに須藤は、同世代の詩人・三角みづ紀との対話を通じて、震災体験とその後の詩作を振り返り

ながら、それらを語り直そうとする姿勢を見せている（『世界に投函する須藤洋平×三角みづ紀×荒谷良一 往復書簡』（二〇一三・一一・二〇 株式会社マイナビ）。ともに生存と闘病と詩作とが不可分な生活を送っている二人の詩人において、震災体験がどのような表現を生み出していくのか、今後も見守っていく必要がある。

ワークショップⅢ印象記

岩下 祥子

あまりに大きな悲しみの下に詩は紡がれるのか。紡がれるのだとしたら、それはどのようにして生まれ、読み手へと届くのだろうか。抽象的と敬遠されがちなこの間に今回のテーマ「古典詩と現代詩の協奏——実作者を迎えて」は正面から向き合っている。

高野吾朗氏は、氏ご自身の詩と先行する詩との対話について三つの事例を用いて報告された。高野氏の三篇の詩「Entomology」、「An Erasure Dream」、「A Woman Full of Water」に先行する詩として、それぞれ、峠三吉「影」、Bruce Weigle「Song of Napalm」、高村光太郎「報告（智恵子に）」も朗読され、眼前にて拝聴した「協奏」によって原発は古典詩と共有し得る問題であると再認識した。作者のベトナム戦争従軍経験が下敷きとなった「Song of Napalm」では、救済措置あるいは断罪の道具として女性が描かれている。その詩にインスパイアされた高野氏が述べる「An Erasure Dream」はコードネーム「日本国憲法」のコールガールが「詩人」によって崩壊させられる。国家の戦争責任を一つの肉体で向き合おうと感受を研ぎ澄ます。そのときなぜ壊される女性の身体が想像されるのかについては会場でも活発な議論となったが、問を孕む詩の息吹が問の埋没に抗していることにも大きな意義を感じる。

新井高子氏は、一番影響を受けた原発、原爆に関する詩としてトルコ

望「女の子」(イナン・オネル記)を朗読された。ヒロシマを見ていない異国の詩人の巨視的かつ微視的な目は悲しみに届かんとしている。ひとりひとりの人間を見つめながら世界の複雑さに目が届く、そんな詩人の詩性に、会場で議論になった「ヘクシマのあとに詩を書くのは野蛮である」のか?という問への一つの答えを見ることも出来るだろう。ヒクメットとの「協奏」である新井氏の作品「ガラパゴス」「わんさ、わんさと」で原発はシンボリズムの詩で書かれている。ヒクメットの「希望」を抽象化あるいは具象化したような、くすりと笑わせられる詩である。悲しみの只中に笑いたいとき、突破口に神経を悩ませる。その糸口としての詩の可能性を考えさせられた。

実作者二名による、朗読を交えてのご発表はその迫力ゆえに、詩語と作者との絶妙な親和性をこちらにまで疑似体験させてくれるかのようであった。

ワークシヨップⅣ印象記

上村 周平

お三方の発表内容を上手くまとめる自信はなく、単純化の誹りを受けるかもしれないが、アウシュビッツ・原爆・大震災の後の文学(言語)のあるべき姿を、文学者・哲学者たちがいかに思考・表現していったか(いこうとしているか)を辿るものであった。彼らの味わった苦悩や憤りが直に伝わってくるようなこともあり、興味深く拝聴した。タイトルに相応しいものであったと思う。

ところで先日ある詩の「魂は言葉を抜かれると、その魂の宿る体は重くなる…」というフレーズになぜか目が止まった。要するに言葉があるから私たちの身体は軽い、つまり自由なのだということだろう。取り上

げられた表現者たちが、いったんは言語を喪失し、自己解体を余儀なくされた後で、死者に寄り添い、新しい詩的言語を獲得して(こうとした(とする)過程を想起したからこそ、そんな詩の断片にも私は反応したのだと思う。

しかし文学の発展ということを考えると、何も惨劇や悲劇が常にそこにあつたわけでもない。大岡信が、詩人の代名詞ともいえる谷川俊太郎に「宇宙孤独病」という言葉を用いたように(現代の詩人9谷川俊太郎)、生来の感受性から詩が成り立つこともある。またマチネ・ポエティックが不評に終わりそう多くの詩を残さなかったため、今現在余り知られてはいないが、朔太郎ら日本の詩人を愛読し校友会雑誌に投稿したり、その後仏文科で象徴派の詩学を学び、抒情性や韻律にも気を配った福永武彦のような比較的ひっそりとしたケースと色々あろう。

年初に鹿児島市在住の詩人・高岡修氏から新詩集『火口の鳥』を頂戴した。「地球は／四十六億年も／うなだれたままです」(「地軸」)。年明けて久しいが中東情勢など世間はきな臭い。「花吹雪です／死んだ子供たちの手が／枝という枝を／ゆさぶっているのです」(「桜」)。「死んだ子供たちの世界では／指切りは／一度だけです／一度／指をからめてしまふと／ほどこけないのです／ほどこけなくなった指は／ほどこけないまま／切ります／切られた指は／切られたまま／その場所で／咲きつづけます」(「指切り」)。見ていられない程痛々しい。後書きを読むと、四年前に突然亡くなった息子さんの為の詩集だという。「その空地で／夕焼けているのは／捨てられた靴に残る／少年の／小さな足の／記憶です」(「アウシュビッツ」)。死者に寄り添うと先に書いたが、この言葉はもつと普遍的であつていいし拡張性を持たせた方がいいような気がする。高岡氏は「すべての死んだ子供たちの再生のために書かれる詩集があつてもよい」とも述べている。月並みだが文学はあらゆる弱者の味方だ。

彙報

第四六回 原爆文学研究会

○日時 二〇一四年二月二日(日)

○会場 九州大学西新プラザ

○「戦後70年」連続ワークショップⅢ

古典詩と現代詩の協奏―実作者を迎えて

高野 吾朗
新井 高子

○「戦後70年」連続ワークショップⅣ

カタストロフィと詩

司会・コメント 野坂 昭雄

報告1 原民喜における詩と散文の往還―「永遠のみどり」論

高橋 由貴

報告2 アウシュヴィッツとヒロシマ以後の詩の変貌

―パウル・ツェランと原民喜の詩を中心に―

柿木 伸之

報告3 3・11に向き合った詩人たち

中原 豊

機関誌「原爆研究文学」第一四号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一四号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一五年

九月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付し

ての投稿の場合は同年九月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇

〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八二四―〇一八〇福岡市城南区七隈八一―一九―一

福岡大学人文学部中野和典研究室

編集後記

本号では前回から始まった「戦後70年」連続ワークショップのⅢ、Ⅳの発表要旨と印象記を掲載しています。会員外から新井高子氏、柿木伸之氏、岩下祥子氏に原稿を寄せていただきました。御礼申し上げます。

実作者を迎える研究会は久しぶりで、多くの詩を聞き、読むことができました。ナーズム・ヒクメットの詩をもつと読んでみたい、と感じたのは私だけではないと思います。そのヒクメットを紹介された新井さんには、「わんさき、わんさと」(『ベットと織機』所収)という詩がありました。私は「てふてふが一匹ベクレル海峡を渡って行った」という、安西冬衛「春」を踏まえた言葉を聞き、読みながら、広島サークル誌「われらの詩」(一九五〇・八)にも、「あゝ、再び／カキー色の／無数の蝶々が／朝鮮海峡を渡つてゆく」(御庄博実「蝶蝶」という朝鮮戦争を背景とした作品があったことを思い出していたのですが、高橋さんのご発表に引きつけながら、参照される詩と参照する詩の「往還」関係について考えてみたくなりました。

次回研究会は三月七日、八日に長崎大学で開催します。次々回は八月一日、二日、広島市内を予定しています。(楠田剛士)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四―〇一八〇 福岡市城南区七隈八一―一九―一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) / e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>